

つつぼう巻のたぢさん

短い日が惜しげもなく暮れて行た。神田のとある裏通りの四辻に角力の四本柱を可愛くした様な家裏店を前におぢさんは小供達にかこまれてゐた。「おぢさんあたいにそれおくれ、ね、おぢさん」「おぢさんむきやすいやつおくれ」「おぢさんおぢさん今度あたいの番だよ三枚」「おぢさん頂戴、二枚。おぢさんをとりにまいてたのんでゐる聲は數の割にちつともさばがしくなかつた。どの聲にも「よしよし」といふ言葉に態度にだけ出して沈黙のまゝおぢさんは手だけを忙しそうに動かしてゐた。うどん粉を溶いた様なものと蜜の様なものをまぜてピカ／＼に光た眞鍮の板の上へのせ灰ならしのぎざ／＼のないう様なものですうつと平にして瓢箪の型をちよん／＼とその上へ凹状におしつけ一つの瓢箪が一枚の型になる様に筋を入れて切た。無言の儘おぢさんはこつちへ三枚あつちへ二枚と渡してやつた。前にある穴のあいた箱へ一錢銅貨や二錢銅貨五錢と云ふ様に小さな手から落された。「おぢさんむけたから札ちようだい五枚と云て出した手を見ると可愛い、瓢箪が五つ小さい手のひら一ぱいに乗てゐた。おぢさんばそれをよくも見ずにうすきたない厚紙に「三枚」と赤く印で押してあるのと「二枚」と黒く押さつてゐるのを渡した。それからおぢさんはうどん粉の溶いたのと蜜をまぜた様なものを今度は眞鍮の板の上で蒲鉾の様な形にして前の方へ置いた次のば平にしてみたらさつきの通り型をつけはじめた。「おぢさんさつきの七枚むいた子が鐵砲巻き頂戴つて」「おぢさんは「ム」とあごで前の方を指した友達の使に來た子は蒲鉾型のなもらつて歸て行た。長四角のおせんの様

なものゝまわりをかいて完全な瓢箪の形を七枚造り上げると鐵砲巻一つとかへてくれるのであつた。ポチ／＼と小さい音を立てながら子供達の手先は注意深く動いて居た。あらおぢさん此處んところが少しかけたわ」さう云ておせんをながめてゐる子に目もくばらずおぢさんばだまつたまゝ大きくうなづいた。おせんからおぢさんの顔へと目をうつした子は「いゝ？」と嬉しそうにれんを押しして其の先をつづけた。やがて二つの瓢箪が出来た。「おぢさん二枚」何もかいてない汚い厚紙を二枚、おぢさんは小さい木の箱から出してやつた。七枚の瓢箪を續げさまに造り上げる事は子供達にはむづかしいからかつた。又一度に七枚のおせんを買ふ子もあまりなかつた、大抵二枚か三枚づゝをまんべんなくまわりの子達に渡してゐた。一人で七枚を一度に買ふと多勢の子は待ち遠しい思をしなければならなかつた。おぢさんはそないふ子を後まわしにした。「カルメラの様なものよ」とむいた片や（かく事を子供達はむくと云てゐた）むき損なつた瓢箪を食べてる子が説明してくれた。片側だけ下されたカーキ色のノレン兼目よけの様なのが冷たい夕風を充分さえぎつてゐた。蠟燭の灯影がおぢさんと子供達を物語のやうに照してゐた。

(一一、一五)

矛盾はそのまゝにして調和である。

(宗教と其心理より)